明治大学学術成果リポジトリ / MEIJI UNIVERSITY Academic Repository

Title	日本における京劇の動態と課題二〇一七
Author(s)	加藤,徹
Citation	いすみあ明治大学大学院教養デザイン研究科紀要, 10: (3)-(43)
URL	http://hdl.handle.net/10291/19413
Rights	
Issue Date	2018-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/

Meiji University

【論文】

日本における京劇の動態と課題　2017

加藤　徹

In this article, the author analyzes Peking (Beijing) opera's public performances in Japan in 2017, which are classified into 3 categories:

1. Performances by Chinese theaters or performers,
2. Those by domestic theaters or performers (including Chinese people in Japan),
3. Those by others.

Peking opera is an elaborate traditional performance, and a composite art based on tempo, hence its propagation into other countries would be more difficult than diffusion of spatial arts. For instance, in Japan the boom of *Minshingaku* or Ming-Qing-era musics ended in the late 19th century, while Japanese ancient court music and dances called *gagaku*, some of which was imported from China in the 7th century, are still performed and alive in the 21st century. In Japan, the first public performance of Peking opera was held in 1919 when Mei Lanfang theater was invited to Japan. 100 years later, there are now some domestic theaters and classes where the Japanese can learn Peking opera performance. In this sense, Peking opera seems to be taking root in Japan, however, the author points out that there are some hindrances and problems. Two possibilities present themselves: Peking opera becomes part of Japanese culture just as our ancestors accepted the ancient imported Chinese music and dances as *gagaku*, or else Peking opera does not take a firm hold on Japan just as *Minshingaku* lost popularity in Japan after its 100 year boom. The dynamic state of, and issues in Peking opera in Japan provide plenty of clues about culture propagation theory.

1. はじめに

筆者は、中国伝統演劇・芸能文化の伝播と変容に関する研究を行っている[*1]。

中国の京劇界で語られてきたことわざ（梨園諺語）の中に、

千学不如一看、千看不如一練、千練不如一串。

という言葉がある。「千学は一看にしかず、千看は一練にしかず、千練は一串にしかず」とは「千回の座学より一回本物を見るほうがまさる。千回見るより一回自分で練習するほうがまさる。千回練習するより一回自分で本番の舞台に立つほうがまさる」という意味である。伝統芸能の学習には「座学、鑑賞、練習、本番」の4段階があり、実演者（俳優や楽隊など）になるには後者の修練ほど重視される[*2]。

一般に、芸術は、モノの芸術（空間芸術）とコトの芸術（時間芸術）に二分できる。演劇や音楽などの芸能はコトの芸術である。モノの芸術よりも、コトの芸術の伝播のほうが難しい。域外のモノの芸術作品は物品を輸入すればよいが、域外のコトの芸術作品は「実演」の定着が伝播の必要条件となる。域外からコトの芸術が伝播し、現地の文化の一部として受容されるまでには、さまざまな「力学」やプロセスが必要となる。

アジアの芸能が日本へ伝播して需要された歴史を振り返ると、例えば雅楽は日本に定着して千年以上の伝統を誇るが、いわゆる明清楽の流行は19世紀の末には衰え百年ていどで終わった。

中国の伝統演劇である京劇は、20世紀初頭以降、来日公演が行われるようになった。比較的少数ではあるが、日本人のなかには趣味的に京劇の実技を学び、座学と鑑賞だけでなく、練習や本番の段階にまで至る者もいる。将来的に、京劇が雅楽のように定着するか、明清楽のようにすたれるか、今はち

ょうどその岐路にさしかかったころである。

中国の芸能の日本への伝播はどのようなプロセスを経るのか。域外から伝わってきた芸能文化は、どのような段階になれば「受容された」と呼んでよいのか。以下、現在の日本における京劇の上演活動や普及活動の動態を論ずることで、今後の日中文化交流への提言を行うとともに、過去の日本の中国文化受容史の暗黙知的部分を類推する材料としたい。

キーワード

京劇　来日公演　演劇　劇場　文化交流　表象文化

2.　日本における京劇公演および公開イベントの一覧　2017年

日本で京劇が上演される機会は多い。大規模な劇場での本格的な京劇公演だけでなく、イベントでのアトラクション的な京劇パフォーマンスや、公開講座での参考上演、能の仕舞にあたる清唱、文化庁の後援を得ての学校巡回京劇公演など、さまざまな形がある。上演者も、中国本土からプロの劇団を公演の間だけ招聘する場合もあれば、日本の永住権をもつ、ないし日本国籍をもつ京劇のプロが主体となる場合もある。

以下、2017年１月から12月まで日本で行われた京劇公演、および京劇関連の公開イベントのうち、主だったものを並べる。おおむね「公演・イベントの名前、日時、会場、出演者や演目、料金等、備考」の順に記述する[*3]。

大規模な公演は３月からの中国国家京劇院来日公演と、６月からの天津京劇院来日公演の２つだが、その他の中小規模の公演でも、挑戦的な試みなど、見るべきものがある。

2017年の日本における京劇関連の公演・イベント（おおむね日時順）

○【講座と鑑賞】ヨコハマアートサイト　こども京劇プロジェクト

日時　1月18日（水）　13:30～14:30（開場は30分前）

会場　横濱山手中華学校　体育館

日時　1月27日（金）　12:30～13:30（開場は30分前）

会場　森村学園初等部　体育館

料金　入場無料（要事前申込）

備考　京劇の参考上演や解説は新潮劇院による。

○【連続講座】京劇化粧と蘇州緙糸（タペストリー）日中文化交流・特別ワークショップ

日時　1月21日（土）　14:00～16:00

会場　東京華僑会館 8階

内容　オープニング・セレモニー「漢服」

第一部「京劇の化粧」　講師　三宝

第二部「蘇州緙糸（タペストリー）」　講師　蔡霞明

料金　入場無料（要事前申込）

主催　一般財団法人　日本京劇振興協会　　共催　東京票房

○【練習体験】新潮劇院　京劇ワークショップ「京劇であそぼ」

主催　新潮劇院　　共催　成城ホール（指定管理者アクティオ株式会社）

講師　張春祥、張桂琴、他

第19回　新春特別企画 京劇上映会

日時　1月15日（日）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室C

第20回　メイクにチャレンジ

日時　2月25日（土）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室C＆D

第21回　衣装にチャレンジ

日時　3月20日（月・祝）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室C＆D

第22回　メイクにチャレンジ

日時　4月2日（日）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室D

第23回　京劇の歴史

日時　6月10日（土）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室E

第24回　メイクにチャレンジ

日時　7月30日（日）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室E

第25回　立ち回りにチャレンジ

日時　8月5日（土）　13:30～15:00

会場　成城ホール　集会室C＆D

料金　参加費無料、一部実費負担あり。

備考　9月以降は、新潮劇院は文化庁の後援による京劇の学校巡業のため「京劇であそぼ」はいったん休止。

○【障がい者による公演】京劇と舞「三岔口」「孔雀の舞」

日時　3月25日（土）　時間　14:00～17:00（13:00受付開始）

会場　大阪市平野区民ホール

出演　王崢　安迪　単仁氷　陸懿

主催　一般社団法人LWF（http://www.lwf-jp.net/）

(8) いすみあ　10号（2018・3）

チケット　前売3,500円　当日4,000円

備考　京劇は、中国から招聘した「中国残疾人芸術団」（中国障がい者芸術団）の演者が上演。

○【大規模来日公演】中国国家京劇院　愛と正義と報恩の三大傑作選

主催　MIN-ON（「一般財団法人 民主音楽協会」略称「民音」）

日時　3月10日（金）～4月28日（金）

会場　詳細は下記。全国各地（千葉、栃木、神奈川、埼玉、新潟、静岡、鳥取、香川、山口、岡山、愛媛、広島、兵庫、京都、石川、大阪、福岡、鹿児島、東京、愛知、秋田、北海道、茨城、福島、群馬、長野、等々）

演目　「金銭豹」「太真外伝」「鎖麟嚢」

出演　中国国家京劇院　総勢62名

主な出演者　于魁智　李勝素　張静　陳国森　馬翔飛　劉魁魁　呂耀瑶　張志芳

チケット　（初日の千葉公演の場合）S席 7,500円　A席 6,500円

※料金の設定は会場により「全席統一料金」など若干の違いがある。

【全国公演スケジュール】

3月10日（金）　14:00/18:30 千葉県 千葉県文化会館

3月12日（日）　14:00/18:30 栃木県 栃木県総合文化センター

3月14日（火）　14:00/18:30 神奈川県 相模女子大学グリーンホール

3月16日（木）　14:00/18:30 埼玉県 大宮ソニックシティ

3月18日（土）　14:00/18:30 新潟県 新潟テルサ

3月20日（月）　14:00/18:30 静岡県 富士市文化会館ロゼシアター大ホール

3月23日（木）　18:30 鳥取県 米子コンベンションセンター

3月24日（金）　18:30 香川県 レクザムホール　大ホール（香川県県民ホール）

3月25日（土）　18:30 山口県 周南市文化会館

3月27日（月）　19:00 岡山県 倉敷市民会館

3月28日（火）　18:30 愛媛県 松山市民会館　大ホール

3月30日（木）　14:00/18:30 広島県 広島文化学園HBGホール

3月31日（金）　14:30/18:30 兵庫県 神戸文化ホール　大ホール

4月2日（日）　14:30/18:30 京都府 ロームシアター京都　メインホール

4月3日（月）　19:00 石川県 本多の森ホール（旧石川厚生年金会館）

4月5日（水）　14:30/18:30 大阪府 フェスティバルホール

4月6日（木）　11:00/15:00 大阪府 フェスティバルホール

4月8日（土）　14:00/19:00 福岡県 アルモニーサンク
北九州ソレイユホール

4月9日（日）　14:00/18:30 鹿児島県 鹿児島市民文化ホール　第1ホール

4月10日（月）　14:00/19:00 福岡県 福岡サンパレスホテル＆ホール

4月12日（水）　14:00/18:30 東京都 中野サンプラザホール

4月13日（木）　11:00/15:00 東京都 中野サンプラザホール

4月15日（土）　14:00/18:30 愛知県 日本特殊陶業市民会館
フォレストホール

4月16日（日）　11:00/15:00 愛知県 日本特殊陶業市民会館

4月18日（火）　18:30 秋田県 秋田県民会館

4月19日（水）　18:30 北海道 ニトリ文化ホール

4月20日（木）　18:30 北海道 旭川市民文化会館　大ホール

4月23日（日）　14:00/18:00 茨城県 茨城県立県民文化センター　大ホール

4月24日（月）　18:30 福島県 いわき芸術文化交流館アリオス　大ホール

4月26日（水）　14:00/18:30 群馬県 群馬音楽センター

4月27日（木）　14:00/18:30 神奈川県 神奈川県民ホール

4月28日（金） 18:30 長野県 ホクト文化ホール（長野県県民文化会館）

備考　上記の他にも、訪日劇団の一部のユニットが本公演とは別に学校向けの舞台上演などを行ったが、割愛する。

○【路上パフォーマンス】第9回　高円寺びっくり大道芸2017

主催　高円寺びっくり大道芸実行委員会

提携　NPO法人劇場創造ネットワーク　座・高円寺

後援　杉並区、杉並区教育委員会　杉並区商店会連合会
東京商工会議所杉並支部

出演　TOKYO雑技京劇団

日時と会場

4月29日（土）および4月30日（日）

13:00～13:30 庚申通り商店街

14:30～15:00 北中通り商店街

16:30～17:00 庚申通り商店街

料金　無料

○【継続的京劇講座】こどものための京劇教室 せたがや子供京劇団

2017年5月より活動開始。

対象　小1～高3までの男女

日時　木曜日 17:15～18:15（月4回開催）

会場　八幡山稽古場（東京都杉並区上高井戸。京王線「八幡山」駅より徒歩8分）

講　師　新潮劇院（主宰　張春祥）

入所金5,000円　参加費5,000円/月

○【実験的コラボレーション公演】「覇王別姫 ～能楽と京劇　日中ユネスコ無形文化遺産の融合～」

日時　5月13日（土）　開場 17:30/開演 18:00 ※全席指定、字幕付き

会場　成城ホール

出演　項羽：張春祥　虞姫（能）：西村高夫　虞姫（京劇）：張桂琴

講演的前説　「能楽と京劇　伝統芸能の様式について」
　　加藤徹（明治大学教授）

演出　張春祥

主催　新潮劇院　　共催　成城ホール（株式会社アクティオ）

チケット　一般：4,300円/世田谷区民：3,800円　高校生以下：1,500円

備考　2015年1月31日（土）　14:00～16:00の横浜市泉区民文化センター「テアトルフォンテ」での再演。

○【公開講座】対談レクチャー　京劇来日公演の課題と展望　―京劇・楊門女将を中心に

日時　6月3日（土）　13:30開始（13:00開場）

会場　明治大学・駿河台キャンパス　リバティタワー6階　1065教室

登壇者　津田忠彦（NPO法人京劇中心*4理事長）　加藤徹（明治大学教授）

料金　無料。事前予約不要。

備考　明治大学の課外授業として行われ、学外からの参加者も多数。

○【大規模来日公演】天津京劇院日本公演「京劇 楊門女将 2017」

主催　日本経済新聞社（全国）NPO法人京劇中心（全国）
　公益財団法人都民劇場（東京）テレビ大阪（大阪）テレビ愛知（名古屋）

共催　人民日報社（全国）

派遣　中国対外文化集団公司

出演　天津京劇院

(12) いすみあ　10号（2018・3）

主な出演者　楊文広：王一　穆桂英：王艶　楊七娘：許佩文

奈太君：魏玉慧　他

東京公演

会場　東京芸術劇場プレイハウス（池袋）

日時　6月21日（水）19:00

6月22日（木）13:30

6月23日（金）13:30

6月24日（土）13:00/17:00

6月25日（日）13:00/17:00

6月26日（月）休演

6月27日（火）13:30/19:00※同日開催「日経アカデミア 特別講座」

講師：加藤徹

6月28日（水）13:30

6月29日（木）13:30

チケット　全席指定8,800円

大阪公演

会場　NHK大阪ホール

日時　6月30日（金）14:00/19:00※同日開催「日経アカデミア 特別講座」

講師：樋泉克夫

チケット　全席指定　S席 8,800円　A席 7,700円

名古屋公演

会場　愛知県芸術劇場大ホール

日時　7月2日（日）15:00

チケット　全席指定　S席 8,800円　A席 7,700円

備考　京劇公演事務局は有限会社「楽戯舎」が担当。

○【教育的合同公演】こども伝統芸フェス2017

主催　一般財団法人　日本京劇振興協会

福岡公演

日時　8月22日（火）14:00/18:30

会場　福岡・久留米シティプラザ・久留米座

出演　「日本舞踊 裕志朗の会（日本舞踊）」「神洲太鼓（和太鼓）」
「八重瀬歌舞団（沖縄組踊）」「新潮劇院（京劇）」「北京金帆京劇団」

大阪公演

日時　8月24日（木）18:30

会場　大阪・豊中市立文化芸術センター・中ホール

出演　「夙川能舞台　瓦照苑（能）」「一如流 佳洲館道場（詩剣舞）」
「大阪龍獅団（中国獅子）」「新潮劇院（京劇）」「北京金帆京劇団」

東京公演

日時　8月26日（土）14:00/18:30

会場　東京・成城ホール

出演　「千葉こども歌舞伎（歌舞伎）」「三田徳明雅樂研究會（日本雅楽）」
「松尾塾伝統芸能（狂言）」「新潮劇院（京劇）」「北京金帆京劇団」

チケット　一般3,000円　子供・学生（大学生以下）1,000円

備考　日本の伝統芸能と、京劇を学ぶこどもたちの舞台発表公演。
京劇の上演では、日本人のこどもたちだけでなく、中国から来日した京劇名優・張四全氏や新潮劇院の主催者である張春祥氏も端役で出演した。
「公益財団法人　関西・大阪21世紀協会」「公益社団法人企業メセナ協議会2021 芸術・文化による社会創造ファンド」等の助成を受けた事業。

○【京劇愛好者の公開イベント】東京票房「金越先生 生誕九十年・没後五周年 記念」演唱会　紀念金越先生九十誕辰五周年祭

主催　東京票房（東京京劇クラブ）

日時　8月27日（日）14:00

会場　新亜飯店別館（東京都港区芝大門2丁目4-1）

内容　第一部 14:00～18:00　京劇演唱 生伴奏による京劇の歌

入場無料　中国から来日したプロの京劇俳優も歌を披露

第二部 18:30～21:00　宴会（自由参加、飲み放題6千円）

備考　中国から、生前の金越氏と交流のあった京劇俳優や京劇演奏者、張四全・丁京蓀・祝宝光・王娟華・李奇その他の名士が来日した。プログラムにそって、プロの京劇俳優や、中国と日本の愛好者が京劇の歌を披露した。生伴奏は、来日したプロ奏者と日本定住者の奏者が合同で担当した。

○【単発講座】立命館孔子学院「京劇の歴史とその魅力」

主催　立命館孔子学院

日時　9月2日（土）10:00～11:30（9:30受付開始）

会場　立命館孔子学院講義室（国際平和ミュージアム2階。京都市北区）

講師　赤松紀彦（京都大学教授）

料金　参加無料、事前申込制

備考　公開講座「中国古典文化講座・伝統演劇シリーズ④」

○【単発講座】日比谷カレッジ「京劇の歴史と魅力」

主催　日比谷図書文化館

日時　9月14日（木）19:00～20:30（開場18:30）

会場　日比谷図書文化館4階　スタジオプラス小ホール（東京・日比谷公園内）

講師　加藤徹（明治大学教授）

料金　参加費1,000円　事前申込制

備考　定員60名（申し込み開始直後に満員、受付終了）。9月2日の立命館孔子学院の講座「京劇の歴史とその魅力」とタイトルが酷似しているのは偶然の一致である。

○【日本語京劇公演】京劇研究会「東京的京劇」

主催　麻布演劇市

出演　京劇研究会

日時　9月22日（金）　19:00

9月23日（土・祝）　13:30/19:00

9月24日（日）　13:30（開場は開演の30分前）

会場　麻布区民センター http://www.azabu-civiccenter.jp/

演目・出演者

「秋江」老船頭：岩本巧　陳妙常：千葉あゆみ（22夜、23夜）樋口理世（23昼、24昼）

「天女散花」天女：竹口美鈴

「辛安駅」周鳳英：塩沢伴子　李氏：鈴木あゆみ　趙芙蓉：下部早苗

趙雁蓉：樋口理世　趙景龍：逢沢脩生　楊勝：冨田正久

スタッフ　舞台監督：池上研治　音響：さかたひろの（ペンギンサウンド）

照明：福田さやか　翻訳：吉田登志子

チケット　全席自由：2,000円（整理番号付・税込）

港区在住・在勤・在学者は無料その他の優遇あり

備考　本公演は、歌やセリフの一部を日本語で上演する「日本語京劇」であり、出演者の大半は日本人である。本公演の正式な公演タイトルは「京劇研究会30周年記念「東京的京劇」第20回公演　～唱あり、舞いあり、芝居あり、立ち回りあり～　麻布演劇市創設30周年記念公演

麻布演劇市第224回」と長大である。

麻布演劇市は、東京都港区の「麻布区民センター」という区の施設と、港区で活動するアマチュア劇団の連携による上演活動である。

○【ワークショップ】「京劇での西遊記 ～孫悟空の動きに挑戦～」

主催　たちかわ創造舎

日時　10月8日（日）14:00～16:00

会場　立川市子ども未来センター・地下スタジオ（東京都立川市）

料金　500円

講師　石山雄太（京劇俳優）

定員　各30名（申込順）

備考　本イベントは、子どもとおとながいっしょに楽しむ舞台 vol. 2「西遊記 ～悟空のぼうけん～」関連企画。

○【学校での公演】立命館孔子学院「桜美林大学 京劇公演」

主催　立命館孔子学院

日時　10月19日（木）16:30～18:00（16:00～受付開始）

会場　立命館大学衣笠キャンパス 以学館2号ホール（京都市北区）

出演　桜美林大学の授業で京劇の実演を学んだ学生、他

演目　「拾玉鐲」「三岔口」「秋江」「白蛇伝・盗仙草」

料金　入場無料・事前申込制

備考　全演目生伴奏つき。楽隊の一部や化粧師は、中国本土から臨時に招聘したプロが担当。

○【実演講座】オペラと京劇～西洋オペラと中国オペラ

主催　新潮劇院

日時　11月26日（日）開場 18:30/開演 19:00

会場　梅丘パークホール（東京都世田谷区松原 6-4-1）

講師　殷秋瑞（京劇・花臉）　張桂琴（京劇・刀馬旦）　大森麗（ソプラノ）
金努（バリトン）　岡田真歩（ピアノ）

料金　一般1,800円　学生500円　未就学無料　飲料付

備考　「世田谷芸術百華2017採択事業」。世田谷区が「身近な場で気軽に文化・芸術にふれることができる秋のフェスティバル」として開催している「世田谷芸術百華」に、新潮劇院のワークショップの企画が採択されたもの。

○【イベント内京劇上演】『和華』創刊四周年特別記念公演
文化中国、芸彩和華

日時　12月８日（金）　18:30～21:00（開場18:00）

会場　文京シビックセンター２階 小ホール（東京都文京区春日 1-16-21）

新潮劇院が京劇『二将軍』（馬超：張春祥　張飛：張小山）を上演（約10分）

チケット　3,000円（当日3,500円）全席自由

主催　日中交流和華会

共催　日中雅交流会　株式会社アジア太平洋観光社

○【イベント内京劇上演】HSK プレスピーチコンテスト

日時　12月16日（土）　14:00～16:20

会場　星陵会館　〒100-0014 東京都 千代田区永田町 2-16-2

新潮劇院が『孫悟空、桃を食べる』（石山雄太）と『虞姫の剣舞』（張飛鳳）を上演

○【講演】2017年度 摂南大学 国際教養セミナー「東アジアの舞台芸術に学ぶ」

日時　2017年12月17日（日）　13:30～16:30（受付13:00～）

会場　大阪市立住まい情報センター３階ホール（大阪市北区天神橋６丁目4-20）

講演　『文楽の劇場いまむかし』―竹本座から国立文楽劇場まで―

久堀裕朗（大阪市立大学大学院文学研究科・教授）

『京劇の魅力』

瀬戸　宏（摂南大学外国語学部・教授）

料金　入場無料、要予約。

○【実演付き学術公開講座】

能楽と崑劇と京劇　名優たちが語る東洋演劇の奥深さ

主催　明治大学東アジア研究所　　共催　株式会社ムーランプロモーション

日時　2017年12月18日（月）　18:30～20:30（開場18:00　途中入退出可）

場所　明治大学リバティタワー１階　リバティホール（1013大教室）

東京都千代田区神田駿河台1-1

料金　入場無料、予約不要（全席自由）。明治大学以外の一般のかたの参加も歓迎。

参考上演演目

『三岔口』　　出演：季雲峰・譚笑

『下山』　　出演：侯哲・湯溌溌

『霸王別姫』　出演：田慧・王楠楠

登壇者

挨拶：土屋恵一郎（明治大学学長）

基調講演：谷好好（崑劇女優、上海崑劇団団長）

坂井音重（能楽師、重要無形文化財保持者）　蔡正仁（崑劇男優、国家一級俳優）　張静嫻（崑劇女優、国家一級俳優）　黎安（崑劇男優、国家一級俳優）　余彬（崑劇女優、国家一級俳優）　田慧（京劇女優、上海京劇院）

閉会の挨拶：耿忠（株式会社ムーランプロモーション社長）

総合司会：加藤徹（明治大学教授）　陸海栄（崑劇俳優）

協力：魯大鳴（京劇俳優、明治大学兼任講師）　呉敏（東京票房会長、明治大学兼任講師）

○【日中合同公演】能楽・狂言・崑劇・京劇の奏でる宴に今酔いしれる　日中楊貴妃の響宴

日時　12月19日（火）・12月20日（水）　18:30（開演は18:00）

会場　国立能楽堂（東京都渋谷区）

演目　19日（火）　京劇『貴妃酔酒』　能『楊貴妃』　崑劇『長生殿』
狂言『蝸牛』

20日（水）　京劇『貴妃酔酒』　能『楊貴妃』　崑劇『長生殿』
狂言『棒縛』　能『石橋 師資十二段之式』

出演　坂井音重　野村萬斎　蔡正仁　張静嫻　黎安　余彬　田慧　他

チケット　S席 12,800円　A席 9,800円（全席指定・税込）

総合プロデューサー　谷好好　耿忠

総監督　崑劇俳優・陸海栄

主催　「日中楊貴妃の響宴」実行委員会

共催　上海戯曲芸術中心　上海崑劇団　上海京劇院

企画運営　株式会社ムーランプロモーション

協力　白翔會　日本崑劇社　上海市対外文化交流協会

運営協力　パソナグループ

上記は2017年に行われた京劇関連の公演・関連イベントの一部であり、全てを網羅したものではないが、おおまかな傾向を把握するには十分な数であろう。

3. 日本における京劇上演の分類

上掲の京劇上演は、大別すると「来日公演」「在地公演」「その他」に三分できる。

3-1 来日公演

来日公演とは、中国本土の京劇団や京劇俳優を日本に公演の期間だけ招聘して行う公演である。

3月・4月の中国国家京劇院来日公演と、6月・7月の天津京劇院来日公演は、トップレベルの京劇団による大規模な来日公演である。このレベルの大規模な来日公演は、興行にあたって高度なノウハウと相応の資金力等を必要とするため、これを実行できる日本側の団体は限られる。京劇来日公演の実務を長年手がけてきた有限会社楽戯舎（らくぎしゃ）や、世界各国からの来日公演を長年手がけ、京劇来日公演の経験も豊かなMIN-ONは、その数少ない団体である。中国から数十名ていどの出演者を招聘し、通算10ステージ以上を上演する京劇来日公演は、多い年でも数回ていどにとどまる。

12月に東京の国立能楽堂で平日の2日間だけ行われた「日中楊貴妃の饗宴」は、公演の期間こそ短いものの、上海から中国トップレベルの崑劇と京劇の名優が来日し、日本の能楽の名優と同じ舞台を踏むという注目すべき公演である。

8月に来日公演を行った北京金帆京劇団はベテランの京劇俳優が指導する北京市の小学生の劇団であり、3月に大阪に来日した中国残疾人芸術団は障がい者による歌舞劇団（京劇はその一部）である。それぞれ小規模な公演ながら、大規模の来日公演とは違うユニークさがある。

来日公演のメリットは、日本側から見れば、本場の京劇を日本の観客に見せることができる点である。京劇の来日公演は良質な文化交流の実践である。特に、中国国内で最高レベルの劇団や俳優が来日公演を行えば、それ自

体が日中両国のメディアにニュースとして取り上げられることも多く、パブリシティ的な効果も期待できる。

中国側から見てもメリットがある。中国本土での京劇上演は、集客の関係もあって、同一演目を同一キャストで連日上演することはまれである（通常、同一演目は１日ないし２日しか上演せず、次々と別の演目を上演するのが常である）。一方、大規模劇団の来日公演となれば、同一の俳優が同一の演目の同一の役を10ステージ以上、連続して演ずることも珍しくない。中国本土の京劇では珍しいこのような連続上演スタイルは、出演者の疲労や負担を増すが、本番にまさる「練習」はないという意味で演目や演技の完成度を高めることができる。また日本は中国と同様の漢字文化圏である。日本の民衆は『西遊記』や『三国志』、項羽と劉邦の戦いなどの物語もそれなりに知っている。日中両国では義理人情などの価値観も共通点が多い。欧米での上演にはなじまない京劇演目も日本公演では上演可能であるなど、日本公演は通常の海外公演よりも上演の選択肢の幅が広がる。

来日公演はデメリットもある。日本側から見れば、出演者の交通費や宿泊費など舞台制作以外の費用がかさむ。そのぶん赤字になるリスクも増大する。中国政府からの補助金が期待できない場合、日本での公演回数を増やしてチケットの売り上げを確保しないと、大幅な赤字になりかねない。公演回数を増やすためには、あらかじめ適切な規模の劇場を長期間連続で予約しておかねばならない。後述するとおり、京劇の上演に適した劇場は、東京ですら意外と少なく、しかもそのような劇場を数日以上連続しておさえることは難しい（日本の人気劇場は数年先まで予約がふさがっていることも珍らしくない）。

京劇に限らないが、来日公演には天災や人災のリスクもある。2003年のSARS（サーズ）騒動や2011年の東日本大震災と福島原発事故、2012年の尖閣諸島国有化の直後は、中国からの来日公演が中止になったこともあった。

小規模な京劇団を招聘する場合は、日本側のデメリットやリスクは軽減さ

れるが、そのぶんメリットも相対的に小さくなる。

3-2 在地公演[*5]

在地公演とは、出演者の大半が日本国内の定住者ないし長期滞在者（留学生なども含む）である公演を言う。在地公演の大半は、劇団が自発的に行う小規模で短期間（通常は1日～3日間ていど）の「自主公演」である。

在地公演の出演者は、日本在住のプロの京劇俳優（永住権ないし日本国籍を取得した中国出身者が多い）や、日本人の京劇俳優、京劇学習者などである。

1987年の京劇研究会の第1回公演（1949年に設立した東京票房との合同公演）は在日華僑華人と日本人実演者の協働による初の京劇上演という意味で、画期的であった[*6]。以来、日本人女優の塩沢伴子氏が会長をつとめる京劇研究会や、京劇俳優の張春祥氏が主宰する新潮劇院、日本在住の華僑華人を中心とする東京票房、その他の複数のグループが、東京を中心に継続的に自主公演を行ってきた。

この他、首都圏の大学では、正規の授業の一環として学生に京劇の実技を教えているところもある。桜美林大学芸術文化学群（京劇の指導は袁英明教授）や明治大学法学部（京劇の指導は魯大鳴講師）では、授業で京劇の実演を習った学生たちが、その成果を舞台上で発表して一般の観客に公開することもある。

在地公演のメリットは多い。まず融通性である。出演者もスタッフも日本在住者なので、事前の練習や打ち合わせを、余裕をもって行える。また、渡航費も宿泊費も不要なので、1ステージないし数ステージていどの単発公演も興行的に可能である。その結果、例えば「平日の1日しかあいていない劇場」を使用することも可能になり、劇場の選択肢が広がる。本格的な劇場公演のほか、遊園地やホテルのイベントなどでのアトラクション的な京劇上演など、多様な上演形態も可能である。

観客から見た在地公演のメリットは、距離感の近さである。中国の同一の京劇団が毎年、来日定期公演を行うケースはまれだが、在地劇団は年に複数回、自主公演や公開練習を行えるので、観客は固定ファンやリピーターになることもできる。

京劇在地公演は、チケット価格も劇場の規模も、おおむね来日公演の半分以下である。2017年の京劇在地公演を見ると、京劇研究会が使った麻布区民センターホールは収容人員237人、新潮劇院が使った成城ホールは収容人員397人である。ちなみに、天津京劇院来日公演の会場だった東京芸術劇場プレイハウスは客席数834席で、約60人規模のオーケストラピットを備えた中ホールだった。劇場の規模が小さければ、観客と舞台との心理的・物理的距離も相対的に近くなる。

在地公演は、天災や人災のリスクも相対的に小さくなる。例えば2012年の尖閣国有化後、中国の芸術団の来日公演が中国側からの申し入れでキャンセルされる事態が頻発したときも、在地公演は政治とは一線を画して予定どおり上演されたものが多かった*7。

以上は上演形態に関するメリットだが、上演のコンテンツについても、小回りのよさを生かした実験的な上演など、大手の公演では難しい挑戦が可能になる。

以下、在地公演のメリットを上演者側の視点から述べた例として、「一般財団法人　日本京劇振興協会」（団体ID 1168756359。京劇俳優・張春祥氏が1996年に東京都世田谷区に設立した京劇団「新潮劇院」を、2016年に財団法人化したもの。劇団としての活動も並行して継続中）の「団体の概要」を以下に引用する*8。

（引用開始。下線は筆者）

■リーズナブルで分かりやすい京劇公演

在日京劇俳優と日本人俳優が出演することで低コストながら本格的な伝

統京劇を上演。上演前には日本人俳優によるわかりやすいレクチャーで様式や鑑賞方法を説明し、劇中も日本語台詞や日本人にわかりやすい演出を取り入れ、初心者でも気軽に楽しめる公演をお届けしています。また、中国劇団の来日公演などでは上演されない古典演目・小演目なども積極的にお届けしています。

■国内文化芸術団体・芸術家との文化交流と実験演劇

伝統京劇と平行して劇団の名称である『新潮』が示す通り、より先進的な芸術表現にも取り組んでいます。在日京劇団ならではの特色を生かし、歌舞伎・能楽といった日本の伝統芸能や舞踏集団「大駱駝艦」といった芸術家たちとのコラボレーション公演や、全編日本語演目の上演など、新作京劇の創作を行っています。

■一般への京劇普及活動

より広く一般の方々に京劇を知ってもらうために各地で京劇ワークショップを行っております。2002年からは世田谷区にて京劇教室を開講。生徒達により行われる京劇発表会は演技・演奏ともに日本人による初の本格的京劇として話題となりました。2015年からは子供から大人まで参加できる無料京劇ワークショップ「京劇であそぼ」を企画し着実に京劇の裾野を広げております。

■日本人京劇俳優の育成

設立当初より日本人京劇俳優の育成にも力を入れ、現在では舞台の主要なキャストを担っております。2009年からは、中国トップの芸術機関である中国戯曲学院大学で講師を務めた張桂琴を迎え、本格的な劇団研修制度を開始しました。2014年には指導を受けた小学生の大島陸が中国最高峰の伝統芸能コンクールである「中国児童戯曲小梅花」にて外国人として

始(ママ)めて参加し、金賞を受賞しました。

■国外文化芸術団体との文化交流

日中をはじめとするアジアの芸術団体と日本の芸術団体とが文化交流できる事業を行っています。

（引用終了）

「低コスト」は、裏を返せば出演者の「持ち出し」が多い赤字ぎりぎり（しばしば赤字）の公演ということである。「日本語台詞や日本人にわかりやすい演出」は、一般の観客にとってはありがたいが、一部の観客には「日本語の京劇はもはや京劇ではない」「日本の一般大衆に迎合して改悪したまがいものの京劇」と批判的に受け取られかねない。「中国劇団の来日公演などでは上演されない古典演目・小演目」の上演は、たしかに大きなメリットである。新潮劇院は過去に『樊江関』（2012）や『十三妹～児女英雄伝』（2014）をはじめ、日本初公演ないし日本でめったに上演されない名作の京劇も上演してきた。

「コラボレーション公演」は、在地京劇団の最大の特色とも言うべきものである。例えば新潮劇院は、2011年には江戸時代の琉球使節団が江戸で上演した中国伝統演劇（唐踊）の演目『打花鼓』を、沖縄の御座楽研究会等と協力して復元上演したが、沖縄側にとっても、国外の京劇団と連携するより、国内の京劇団と日本語で打ち合わせを重ねて芝居を復元するほうが、いろいろな意味で便利だった*9。また新潮劇院は2015年と2017年には、能楽師の西村高夫氏と共同で能楽と京劇を融合させた新作を上演するなど、能楽や歌舞伎とも積極的なコラボレーションを行ってきた。

1987年設立の京劇研究会も、ドイツのブレヒトの演劇作品を京劇の手法で日本語で上演する、とか、京劇の原作演目と、その演目の物語を現代日本に移した翻案劇を比較上演する、など、過去にさまざまなユニークな演目を

上演してきた。約70年の歴史をもつ東京票房も、伝統京劇だけでなく、革命現代京劇を上演したこともある。こうした挑戦的な公演は、在地公演の真骨頂と言える。

京劇の普及活動や日本人俳優の育成も、在地劇団ならではである。京劇来日公演を見て「自分も京劇の実演を学びたい」と思った日本人が門を叩くのは、京劇研究会や新潮劇院、東京票房（「票房」という性格上、歌が中心）等の在地劇団である。

これらの在地劇団は、公演のときは、衣装の融通や楽隊の生演奏、助演者などの面で、互いに協力し合うのが常である。例えば、京劇研究会や新潮劇院の公演で楽隊の生伴奏が必要なときは、東京票房の演奏者が伴奏に加わる。逆に、東京票房が劇場を借りて公演するときは、舞台衣装の一部を京劇研究会や新潮劇院から借りる、等々。

一方、在地公演には、限界も多い。

実演者のうち、フルタイムのプロ俳優は少数であり、出演者の多くは他に職をもつ兼業者か、学生である（演劇活動だけで生活収入を満たすのが困難である点は、京劇に限らず、日本の演劇界一般の常態でもある）。練習量にも限界がある。中国本土のプロ俳優は、まだ体がやわらかい小学生のころから京劇俳優養成の職業学校で専門的な訓練を受ける。特に「立ち回り」の役は、子供のうちから訓練をつまないと、プロの京劇俳優になるのは難しい。中国に留学してプロの京劇俳優になった石山雄太氏や、新潮劇院で京劇を学び中国本土の児童京劇コンクールで金賞を受賞した日本の小学生（当時）大島陸氏[*10]は、希有の例外である。在地公演を、規模や演技のレベルの面で来日公演と比較するのは、酷であろう。

ともあれ、京劇の「学・看・練・串」の四段階のうち、一般の日本人が「練習と本番」をも体験するためには、在地劇団の存在が不可欠である。京劇の域外への伝播と受容という観点からすれば、在地公演の効用を軽視すべきではない。

3-3　その他

京劇そのものの上演ではないが、日本人が京劇を知るきっかけになりうる上演や講演、イベント、その他の要素も重要である。

例えば、1993年の香港・中国の合作映画『さらば、わが愛/覇王別姫』(中国語の原題は『覇王別姫』) は、主演の俳優たちは京劇のしろうとであり、彼らが劇中劇的に演ずる京劇のレベルには問題があるものの、当時はこの映画をきっかけに京劇に興味をもった日本人も少なくなかった。

日本でも21世紀初頭までは、テレビで京劇来日公演の舞台中継を放送した。例えば、2005年2月には、NHK 衛星第2放送の番組「山川静夫の新・華麗なる招待席」で、湖北省京劇院来日公演『京劇西遊記―孫悟空 三打白骨精』の実況録画が放送された。2005年までは京劇の来日公演があると、その後、テレビの地上波ないし衛星放送で京劇の舞台を放送するのが常だった。しかし2005年あたりを境に、日本のテレビ番組で京劇の舞台上演を放送することは減った（京劇だけでなく、歌舞伎など一部の舞台芸術を除き、演劇そのものの放送枠が激減した)。

テレビに京劇が登場することがなくなったわけではない。2010年9月から NHK で放送された特集ドラマ『蒼穹の昴』では、西太后（演じたのは田中裕子氏）が京劇を観劇するシーンがでてくる。2011年3月1日（火）に NHK BShi で放送されたドキュメンタリー番組「ハイビジョン特集　二人の旅路　～日中　激動を生きた京劇夫婦～」は、日本に移住した京劇俳優の半生を取り上げた。

日本の若者に人気がある漫画やアニメでも、たまに京劇が出てくる。皇なつき氏の漫画『燕京伶人抄』(潮漫画文庫、2004年）や上田宏氏の漫画『武神戯曲』(単行本は2004年）は、京劇俳優を主人公とする漫画作品であった。2017年現在でも、青木朋氏や滝口琳々氏など、京劇のビジュアルや趣向を自作に生かしている漫画家がいる。

京劇は総合芸術である。京劇の発声法、歌唱法、韻白や京白など独特な中

国語をマスターしたうえで長大なせりふと歌詞を暗記し、京劇の型にあった所作で演ずるためには、高度な修練を必要とする。京劇の総体が日本人の一般的な教養として受容されることは、難しいだろう。ただ、日本の漫画作品の登場人物が京劇の衣装を着用するなど、京劇のビジュアル的要素の受容は、すでに始まっている。

京劇に限らないが、外国の芸能や文化（スポーツなども含む）の伝播と受容においては、「本物」の一次創作のみならず、ドキュメンタリー番組や映画作品、インスパイア系の二次創作なども重要な意味をもってくる。この意味で、日本での受容の度合いの指標として、「その他」のジャンルも有用であろう。

4. 課題

以上、2017年における京劇の上演・関連イベントの動態を見たうえで、上演の主体を分類し、メリットとデメリットなどを論じてきた。そのうえで、最後にいくつか課題を論ずることにしたい。

4-1 劇場の少なさ

東京都内の劇場の数は、一見すると非常に多い。しかし、京劇の来日公演にふさわしい劇場となると、その数は限られる。最大のネックは日程である。

例えば、中国のトップレベルの劇団による大規模来日公演の23区内での公演は、近年は、池袋の東京芸術劇場・プレイハウス（客席数834席）か、中野の中野サンプラザホール（客席数2222席）に固定化している。

京劇公演事務局・楽戯舎が制作を手がける京劇来日公演は、毎年、東京芸術劇場の中にある中規模ホールのプレイハウスを借りて行う。池袋駅から雨にも濡れずに歩いてゆけるという交通の便もさることながら、この劇場の条件が京劇を美しく見せるのに適しているからである。ステージのサイズや楽屋の広さ、京劇の上演でつるしものをするときに使うバトンの数なども重要

な条件だ。京劇俳優の生声や楽隊の生演奏の音が、マイクなど音響装置で補助するにせよ、客席のすみずみにまで届くように考えると、客席の広さや奥行などの形状も重要である。同じ東京芸術劇場内の劇場でも、コンサートホール（1999席の大ホールで、舞台正面にパイプオルガンがある）やシアターイースト（小ホール）、シアターウェスト（小ホール）は、プレイハウスにくらべると京劇の上演には適していない。逆に、もしこれらの劇場で京劇の来日公演を行うのなら、劇場の条件にあった演目を選び、それなりの演出を凝らさねばならない。

京劇に限らず、俳優の慣れや移動の疲労等を考えると、移動日を少なくして、なるべく同一劇場で上演することが望ましい。2017年に楽戯舎が手がけた天津京劇院日本公演「京劇 楊門女将 2017」は、東京では6月21日（水）から6月29日（木）までだった。事前のリハーサルやゲネプロなどを考えると、毎年、一つの劇場を連続で10日間ていどおさえる必要がある。実は、これが難しい。

近年の日本の舞台興業は構造的に不景気だが、逆説的に、そのために劇場やコンサートホールが不足する「2016年問題」が深刻化している*11。音楽イベントも演劇も、一回あたりの公演の収益が少ないため、公演の数を多くして補おうとする。近年の出版不況で一冊あたりの売れ行きが低下した結果、出版社が書籍の出版点数を増やしているのと似た状況である。しかも2020年の東京オリンピックに向けて、首都圏の劇場やコンサートホールが改修工事などのために続々と閉鎖し、劇場不足に拍車をかけている。東京だけでなく、福岡や名古屋など地方都市でも類似の悪い状況が生まれつつある。こうした中で、日本では、めぼしい劇場は数年先まで、虫食い状に単発の予定が入ってしまっていることが多いのだ。

楽戯舎は例年、10日前後も連続して東京芸術劇場を予約できたが、今後もうまくゆくかどうかは未知数である。

MIN-ON が招聘する来日公演も同様である。中野サンプラザホールは、

JR 中野駅を下車して徒歩１分という便利でわかりやすい場所にある。MIN-ON による京劇来日公演の歴史は長いが、過去５回に限ってさかのぼって見ると、

2002年　中国京劇院『扈家荘』『盗仙草』『秋江』『鬧天宮』
　３月16日（土）　14:00/18:30 文京シビックホール
　３月19日（火）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
　追加公演　４月28日（日）　中野サンプラザホール
　追加公演　４月29日（祝・月）　中野サンプラザホール

2006年　中国京劇院『三国志　～諸葛孔明～』
　７月25日（火）　14:00/18:30 文京シビックホール
　７月27日（木）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
　７月28日（金）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
　８月３日（木）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
※中国京劇院は2007年に「中国国家京劇院」と改名した。

2009年 中国国家京劇院『宋江と梁山泊の英傑たち　～水滸之誓～』
　11月25日（水）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
　11月26日（木）　14:00/18:30 中野サンプラザホール

2014年　中国国家京劇院「梅蘭芳」芸術特選
　５月14日（水）　14:00/18:30 中野サンプラザホール
　５月15日（木）　14:00/18:30 中野サンプラザホール

2017年　中国国家京劇院「愛と正義と報恩の三大傑作選」
　４月12日（水）　14:00/18:30 中野サンプラザホール

4月13日（木）　11:00/15:00 中野サンプラザホール

と、2006年以降は平日の中野サンプラザホールで上演するのが通例となっている。勤め人や家族連れの集客を考えれば、土曜や休日のほうが好ましいが、そうなっていない。世界各地から器楽、歌舞、演劇などの団体を招聘して来日公演を頻繁に行っているMIN-ONでさえ、23区内の土日に京劇来日公演の劇場を確保するのは、容易ではないのかもしれない。

ただし、MIN-ONの京劇来日公演は、千葉・埼玉・神奈川など首都圏の複数の劇場でも行われるが常である。東京圏の在住者は、23区内の平日公演を見に行けなければ、土日に近郊の公演を見に行くという選択肢もある。

劇場の数が多い東京でさえ、このような状況である。まして東京以外の都市における劇場の状況は、推して知るべしである。

余談ながら、近年、中国から大規模な歌舞団や芸術団が来日して、平日に1日か2日ていど公演して帰国する、というケースがまま見られる。筆者の個人的な伝聞によれば、近年の中国政府は民族文化の発揚と対外イメージ戦略に力を入れており、その政策に合致する海外公演については中国政府が補助金を支給するケースも増えているという。近年、中国側から日本側に、資金面は心配ないのでぜひ来日公演をさせてほしい、とか、日本で講演会を開きたい、というオファーが激増している背景には、そんな事情があるらしい。そんな場合ネックになるのが、日本の劇場やホールの予約のしづらさなのである。

公演まであと数ヶ月という時点では、東京都23区内のめぼしい劇場を予約するのは難しい。劇場のスケジュールがたまたま平日に1日ないし2日あいていれば、そこで公演するのがせいぜいである。めぼしい劇場を土日や祝日におさえようと思ったら、あるいは一週間ていど連続しておさえようと思ったら、東京では数年前から予約にむけて動きはじめる必要がある。楽戯舎やMIN-ONのように、長期的かつ継続的な展望をもって動く経験豊かな

団体でないと、劇場の予約を取ることすら難しいのだ。

在地公演のように区民センターや公民館レベルの舞台を使うのなら、本番の数か月前でも、まだあいている可能性がある。が、こうした劇場は設備も収容人員も大規模来日公演には向いていないことが多い。

「2016年問題」は、現代のポップカルチャーの公演だけでなく、京劇のような伝統演劇の公演にも影を落としている。

4-2 新規の観客層の拡大

京劇に限らないが、次代をになう若年層や子供を中心に新規の客層を開拓することは、リピーターを確保することと同様に重要である。

日本で京劇を見る観客の平均年齢や、リピーター率は、どれくらいなのか。

以下、天津京劇院日本公演「京劇 楊門女将 2017」の観客を対象として主催者が行ったアンケート調査の結果の一部を引用する*12。

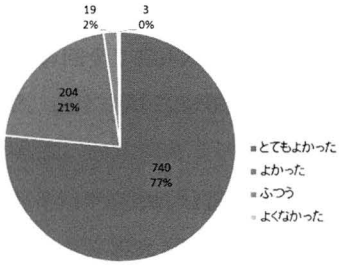
まず全体の感想は「とてもよかった」と「よかった」が98％を占めた。残り2％は「ふつう」で、「よくなかった」は0％だった。一般に、観劇した後もアンケート用紙に書き込んでくれる観客は、熱心で好意的な人が多いと予想されるが、これだけ好意的な反響は立派である。

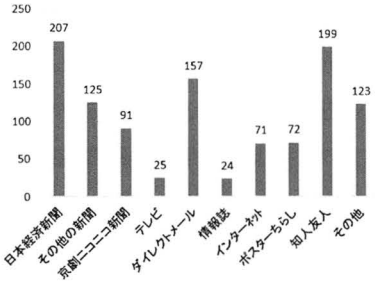
次に、どこがよかったかを見ると、観客の多くが「立ち回り」「衣装」などビジュアル面を高く評価し、「音楽」「歌唱」などオーディオ面の評価も悪くない。「俳優」は、歌唱や立ち回りやセリフ、演技などを総合した項目であり、アンケートの回答者はその点をあまり深く考えずに心証で回答したと思われるが、これも半数以上が評価している。

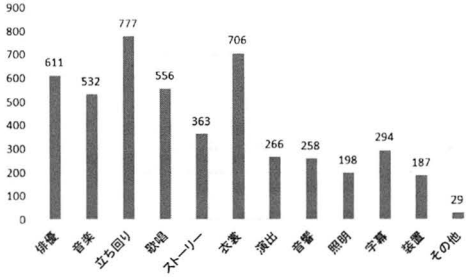
一方、意外とふるわなかったのが「ストーリー」である。『楊門女将』の物語は、筆者はじゅうぶんに面白いと思うのだが、ストーリーがよかったと回答したのは全体の35％にすぎない。孫悟空とか『三国志』の話と違い、日本人になじみのうすい時代の物語であった点が、ややマイナスに働いたのかもしれない。また、演出・音響・照明・字幕・装置などはおしなべて「よ

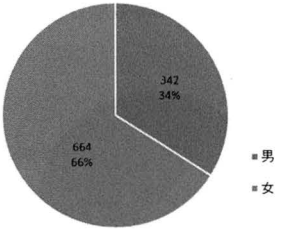
アンケート実施場所

東京・大阪・名古屋公演　全 14 ステージ
回収枚数 1,030 枚









情報提供：日本経済新聞社・NPO 法人京劇中心

かった」という評価が低いが、これは縁の下の力持ちという仕事の性質上、しかたがない。音楽や歌唱の評価が高かったのは音響スタッフの働きが良かった証拠であろうし、衣装が美しく見えたのは照明スタッフが仕事をしたおかげもあったと評価できよう。

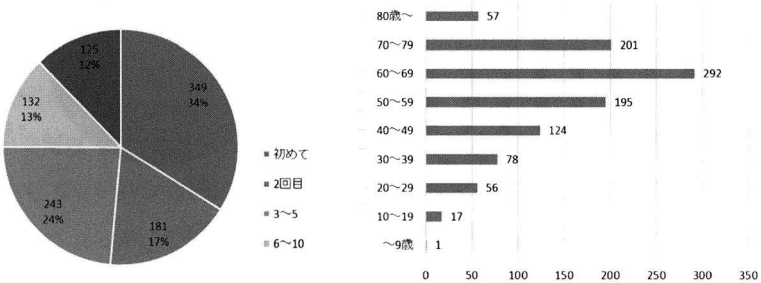
公演を知ったきっかけを見ると、新聞などの紙媒体の比率が意外に高い。これは、後述するとおり、回答者の大半が中高年層であることと関連する。若年層に限れば、インターネットなどが高くなる可能性がある。

観客の性別は、男性34％、女性66％だった。女性のほうが多いのは、例年と同様の傾向である。日本では一般に、舞台演劇の観客は女性のほうが多

い傾向がある。ただ、2017年の演目は『楊門女将』という女性の登場人物たちが大活躍する物語であったので、それも多少は数字に影響しているのかもしれない。

回答者の年齢層を見よう。回収枚数は1,030枚だが、年齢の回答があったのはそのうちの1,021枚である。60代以上の回答者は550名で全回答者の54％を占める。逆に、19歳までの未成年は18名で、1.8％にすぎない。29歳以下までに拡大しても7.4％である。

終演後も客席に残ってアンケートを書く熱心な観客は、中高年に多いことが予想される。筆者は実際に公演の劇場に何度か足を運んだが、その時の印象では若い観客もそれなりの数がいたように思う。とはいえ、日本で京劇を見る観客は中高年層が多いことは確かである。



情報提供：日本経済新聞社・NPO 法人京劇中心

今まで京劇を見た回数を見ると「初めて」は34％にすぎない。京劇を見るのが２回目以上というリピーターは66％を占める。日本で京劇を見られる機会は限られることを考えると、これは注目すべき数字である。日本で京劇が一定の人気を得ていることの証しであると考えれば、リピーターが多いのは喜ばしいことだ。が、新規の観客の開拓という視点では、初めて京劇を見る客が34％というのは、やや寂しい。

筆者が知る限り、日本での京劇公演の主催者は、どこも若い観客層の新規

発掘に力を入れている。若者に親和性が高いインターネットを活用した宣伝とか、若者にもわかりやすくイラストや漫画を使った解説パンフレットを作成するとか、若者にもチケットが買いやすいよう価格面や購入手続き面で工夫をするなど、さまざまな努力をしている。

4-3　漢字表記の工夫の必要性

一般に、日本の若者世代は、自分の日々の感想や身の回りのニュースを「ツイッター」などSNSに載せる傾向がある。来日京劇公演の前後は、ツイッター上に京劇を見た感想の投稿が激増するが、大半は若者世代の感想である。筆者は日本で京劇の大きな公演があるたびに「togetterまとめ」を使ってそれらのツイートをまとめて保存するようにしている。2017年の京劇来日公演については、

中国国家京劇院 来日公演 2017　https://togetter.com/li/1089465
京劇 楊門女将 2017天津京劇院日本公演
https://togetter.com/li/1105354

などにまとめた。一般人のツイートなので権威性はないが、若年層を含む日本の観客の生の感想を知るうえでは、一定の資料性が認められよう。

京劇を見た若者、例えば高校生や大学生くらいの世代は、観劇後の興奮がさめやらぬまに感想を写真つきでツイッターにアップする傾向がある。2017年の反応も良かったが、2016年の中国国家京劇院『白蛇伝』来日公演のときは、若者世代を中心とするツイッター上での反応はことに盛り上がった。当時、筆者はそれらのツイートを、

京劇「白蛇伝」2016 感想のまとめ 中国国家京劇院 来日公演
http://togetter.com/li/984271

にまとめ、来日した劇団メンバーに渡して喜ばれた。例えば、

「京劇、白蛇伝を観劇してきたんだが、/なんかもう、ボロ泣き」2016-05-31 21:57:01

「白蛇伝つくった中国人ほんとうに神でしょ……むり……ありがとう……😭😭」2016-06-03 13:57:50

「最初から白蛇伝を知ってたら私が青ちゃんに花束あげたわ（・∀・）」2016-06-07 20:58:40

のように、ネットスラング的な口調によるツイート（投稿者のユーザー名は小論では割愛）が、毎ステージ後に大量にアップされた。

筆者が思うに、2016年の京劇公演がこれほど盛り上がった一因は、『白蛇伝』のストーリーや舞台の完成度もさることながら、字面の要素も大きいであろう。『白蛇伝』というタイトルや「小青」などの登場人物名は、日本の常用漢字の範囲内だ。若者世代もスマホなどで簡単に字を打ち込むことができる。いっぽう、2017年の『楊門女将』は、タイトルの「楊」という漢字も、ヒロインの名前「穆桂英」も、日本の青少年がケータイやスマホで打ち込むのは、簡単でないかもしれない。

タイトルやキャラクターの漢字表記は、一見、些末な事のようだが、実は重要である。実写映画やアニメ映画でも、タイトルやキャラクターのネーミングのセンスは、観客動員数に影響する。今後は、京劇の来日公演にあたって、あえてもとの中国語の漢字にこだわらず、日本向けのタイトルや登場人物名を考えるなど、発想の転換が必要となるかもしれない。

4-4 チケット価格の設定

一般に、海外の一流の劇団やアーチストの来日公演のチケット代は高い。例えば、バイエルン国立歌劇団によるワーグナーの歌劇『タンホイザー』

の日本公演を見ると、2017年９月21日（木）東京のNHKホールでのチケットの価格設定は、

S席65,000円 A席59,000円 B席54,000円 C席42,000円 D席32,000円

であった。一番安いD席の値段すら、京劇来日公演のS席の数倍である。日本には、これだけの料金を払っても欧州の歌劇を見たがる観客層が一定数存在するのである。

大衆芸能についてはどうか。韓国の男性デュオ「東方神起」の日本公演は、2017年11月11日（土）の札幌ドームのチケット代は一律１万800円に設定されていた。京劇来日公演のS席より高価である。東方神起のパフォーマンスがすばらしいことは認める。１万円あまりチケット代を喜んで払う観客層が日本に存在することもわかる。が、最高レベルの数十名の京劇俳優たちによる来日公演よりも、デュオすなわち２人組のステージのほうがチケット代が高いという事実は、いろいろ考えさせられる。

ビートルズの元メンバーであるポール・マッカートニー氏が来日し2015年４月28日（火）に日本武道館でコンサートを行った際のチケット代は、

SS席10万円、S席８万円、A席６万円、B席４万円、C席2,100円

であった。C席だけが異常に安いのには理由がある。C席の2,100円は1966年のザ・ビートルズ武道館公演と同じ料金で、1966年の物価水準から換算すれば、当時の2,100円は現在の１万数千円ていどに相当する。主催者は「25歳以下限定」「C席はキョードー東京チケットオンラインのみでの受付」などの条件をつけて発売した。

さて、世界最高レベルの京劇団の来日公演ですら、日本ではチケット代は１万円未満である。これは、日本には１万円以上払っても京劇を見たいと思

う観客層が、それほど存在しないことを意味する。

それでも昔はまだ良かった。日本の経済力が強く、円高傾向だった20世紀末までは、日本人の感覚では比較的安い費用で中国の一流劇団を招聘することも可能だった。しかし日中両国の経済力が逆転した21世紀の今日、状況は来日公演にとっては悪い方向に進んでいる。

京劇のチケット代を見ても、昔は北京で京劇を見るほうが安かったが、今は、部分的には東京で京劇を見るほうが安くなってしまった。

2017年3月～4月に来日公演を行った中国国家京劇院を例に取ると、来日メンバーを含む俳優たちは、11月12日に北京の国家大劇院劇場で、日本公演でも上演した『鎖麟囊』を上演した。そのチケット代は

100元、200元、300元、400元、500元

の5段階に設定されていた*13。為替レートを「1元＝17円」として換算すると、北京でのチケット代は1,700円から8,500円までとなる。最も高い座席の料金だけを比較すれば、北京より東京で京劇を見るほうが安いことになる（MIN-ONによる来日公演の中野サンプラザホールでの価格設定はS席7,500円、A席6,500円だった）。

日本経済のデフレ傾向と中国経済のインフレ傾向が今後も変わらなければ、近い将来、中級ランク以下でのチケット代の逆転も起こりうる。チケット代は、俳優への報酬ともリンクする。そうなれば、中国から一流の京劇団を招聘して日本公演を行うことは、困難になってしまうだろう。

とはいえ、京劇来日公演のチケット代の相場を値上げすることは簡単ではない。京劇の観客層を増やすという意味では、チケット代は安いほうがのぞましい。

チケットの価格設定は、悩ましい問題である。

4-5　京劇とインバウンド

筆者がまだ学生だった1980年代は、中国大陸と台湾・香港の往来がまだ比較的に不自由であったこともあり、中国の有名な京劇団が来日公演を行うと、台湾や香港の京劇愛好者が日本に京劇を見に来ることも珍しくなかった(彼らの多くは当時、筆者が通っていた東京票房にも立ち寄った)。現在でも、欧米の有名なアーチストが日本公演を行うと、韓国などから日本に見に来る客がいる。

現在は、中国本土と周辺地域の往来の自由化が進んでいるため、わざわざ日本に京劇を見に来る海外の富裕層がそれほどいるとは思えないが、上演演目や俳優の顔ぶれなどを工夫すれば、上演にあわせて日本旅行を考える海外の京劇ファンもいるかもしれない。

例えば2009年をふりかえると*14、この年は日本国内の在地劇団による京劇公演だけでなく、京劇来日公演も多い年だった。京劇公演事務局・楽戯舎は

○6月4日～6月20日

天津青年京劇団『京劇 覇王別姫～漢楚の戦い～』

○9月26日（土）～10月5日（月）

「TOKYO京劇フェスティバル2009」

と1年に2度も池袋の東京芸術劇場で大規模な来日公演を手掛けた。特に後者の「TOKYO京劇フェスティバル2009」は「京劇集団200名超が競演する日本初の京劇芸術祭」という画期的なイベントだった。連日、湖北省京劇院『徐九経昇官記』、中国国家京劇院『水滸伝　三打祝家荘』、上海京劇院『水滸伝　烏龍院』、北京京劇院『三国志　呂布と貂蝉』などが互いに雁行しつつ上演を行った。

MIN-ONもこの2009年の10月7日～12月10日に中国国家京劇院の『水滸

伝』（宋江と梁山泊の英傑たち ～水滸之誓～）の全国公演を実施した。

その他、日本国内の新潮劇院や東京票房、張紹成劇団（北方昆曲劇院を招聘）なども、それぞれユニークな京劇の上演活動を積極的に行った。

2009年は、まだそれほど遠くない過去である。その気になれば、日本でも、中国本土とは一味違ういろいろな京劇公演を行うことは可能である。

近年の日本では何かとインバウンドが話題となる。日本の劇場興行も、少子高齢化の影響もあり、構造的不景気に悩まされている。チケットの価格や観客数の減少傾向などの問題を考えるうえで、今後は演劇についてもインバウンドの視点から工夫をする必要があるかもしれない。

演劇とインバウンドを考えるうえで、筆者は、日本の食文化コンテンツの成功体験が参考になると考える。

来日する外国人旅行者にとって、日本での食事も大きな魅力である。訪日外国人のあいだでは、寿司や蕎麦など従来型の和食だけでなく、ラーメンやカレーなど外国起源の日本食も以前から人気がある。世界的に有名な『ミシュランガイド』の東京版『ミシュランガイド東京2017』には542店のレストランが掲載され、「星付きレストラン」は一都市としては世界最多の227店にのぼる。星つきレストランの中には和食以外の店も多い。つまり、外国料理を提供する店も含めて日本の魅力の一部をなしているのである*15。

食も演劇も、人間の楽しい思い出作りの材料という点では同じである。東京をはじめ日本各地には数多くのユニークな大小の劇場があり、特色ある演劇が上演されている。外国にルーツをもつラーメンやカレーの料理が日本の味として評価されているように、将来的には、京劇その他の外国にルーツをもつ演劇文化も、「日本化」の工夫しだいでは日本の魅力の一部になりうる。また、そうなってこそ初めて、京劇は真の意味で日本に受容されたといえる、と筆者は考える。

むすび

かつて中国から日本に伝播し、受容された芸能には共通点がある。

雅楽の中の唐楽は、遣唐使の時代に国家主導型で輸入され、日本文化の一部となった。

明清楽は、江戸時代に民間レベルで輸入され*16、明治の末年まで流行した。明清楽そのものの流行はすたれたものの、明清楽、特に清楽は、大正時代以降の日本の大衆音楽に一定の影響を残した。

雅楽も明清楽も、最初は日本人が中国人から直接に学んだものであるが、後には日本人の師が日本人の弟子に伝授するようになり、日本化が進んだ。雅楽も明清楽も、単に音楽というジャンルのみならず、日本文化の他のジャンルと影響を与えあった。平安時代から室町時代にかけての古典文学作品にはよく雅楽が登場するし、清楽は「かんかんのう」や「法界節」などの俗謡だけでなく、煎茶道など近世の文人趣味の世界とも密接にリンクした。

京劇の日本への伝播は、1919年の梅蘭芳らの京劇公演に始まる。以来、約百年の歳月がたつ。梅蘭芳の3度にわたる来日京劇公演が政財界の動向と結びついていたように、京劇は、雅楽のような国家主導型とも、清楽のような民間レベルでの輸入ともやや違う、第三の経路で日本に伝わった。

2018年現在、日本出身者が日本人に京劇の実技を教える京劇研究会のような例外もあるが、日本における京劇の伝授の多くは、中国出身の先生（国籍は日本であることもある）が日本人の生徒に教える段階にとどまっている。雅楽や明清楽のように、日本国内出身者で「学・看・練・串」のサイクルが完結するまでには至っていない。しかしその一方で、京劇のビジュアルや趣向が漫画作品など日本のサブカルチャーに採り入れられるなど、京劇と日本文化とのリンクも芽生えつつある。

日本における京劇の受容は、現在進行形である。これを参与観察的に研究し、中国芸能の「日本化」のプロセスを分析することは、過去の日本人が雅

楽や明清楽など外来の芸能文化を受容した歴史を省察するうえで、また、中国芸能の域外伝播と変容のメカニズムを考察するうえで、一定の参考になるであろう。

注

*1 拙論は以下の科研費による成果の一部でもある。科学研究費助成事業（科研費）「中国伝統演劇・芸能文化の域内・域外における、成立と伝播・変容に関する総合的研究」研究課題番号：15H03196　研究代表者・福満正博（明治大学教授）研究期間：2015年4月1日～2020年3月31日（予定）　研究分野：中国文学　研究種目：基盤研究（B）

*2 中国の教育現場では「千学不如一看、千看不如一練」までが使われ、京劇を含む中国伝統芸能の世界では「一串」の一句を追加して使う。この「梨園諺語」の最初の出典は不明である。

*3 以下の情報は、筆者が個人的に公開しているサイト「京劇カレンダー」http://www.geocities.jp/cato1963/KGevent2017.html で公開した記述を簡潔にまとめたものである。

*4「京劇中心」は「京劇センター」の意のNPO法人である。設立の目的は「青少年および中国文化に関心を有する者に対して、京劇公演を中心に中国文化の紹介活動を行い、日本と中国の相互理解を促進して日中文化交流に寄与すること」で、その所在地は、京劇公演事務局の楽戯舎（有限会社）と同じである。設立認証年月日は2010年3月9日、法人番号は7010005014905。

*5「来日公演」の適切な対義語は存在しないため、小論では便宜的に「在地公演」という造語を使う。

*6 加藤徹「京劇漫談」『研究誌季刊中国』1993年冬季号（季刊中国刊行委員会）、pp. 44-53、1993年12月

*7 筆者のサイト「京劇カレンダー」の2012年の記録 http://www.geocities.jp/cato1963/KGevent2012.html を参照のこと。

*8 日本財団が提供する公益事業のコミュニティサイト「CANPAN」の以下のウェブページより引用　http://fields.canpan.info/organization/detail/1168756359 2017年10月31日更新　2018/2/16閲覧

*9 復元された「唐踊」と、復元に至るまでの過程については、本郷義明監督のドキュメンタリー映画『よみがえる琉球芸能 江戸上り』（2011年、本編69分）に収録されている。

*10 大島陸氏については、「京劇・二胡　日本と中国の懸け橋に　友好の交流」『毎日小学生新聞』2017年5月4日その他、何度か日本の新聞記事でも紹介されている。

*11 この問題については、日経電子版の以下の記事が詳しい。小林明「ホール・劇場不足、「2016年問題」はなぜ起きた？」2016/7/22　https://style.nikkei.com/article/DGXMZO05036370Q6A720C1000000

*12 このアンケート情報の所有者は、主催である日本経済新聞社とNPO法人京劇中心である。後者が発行する『京劇ニコニコ新聞』2017年8月1日号でもこのアンケート情報はより詳しい形で紹介されている。

*13 これは「首都票務網」のサイト（中国）で購入できるチケットの価格である。http://www.piao88.com/ticket/1114.html　2017/10/30閲覧

*14 2009年の日本における京劇上演については、筆者が公開しているサイト「京劇カレンダー」の2009年の記録 http://www.geocities.jp/cato1963/KGevent2009.html を参照のこと。

*15 訪日ラボ「ミシュランガイドで星の数が最も多い都市「東京」」https://honichi.com/news/2017/10/18/michelinguidextokyo/ 2017/10/30閲覧

*16 明清楽を含む中国伝統芸能の日本への伝播ルートを社会階層の面から分類した論考つにいては、加藤徹「近世日本における中国伝来音楽の諸相　――明清楽を中心に」（小島毅・編『東アジアの王権と宗教』アジア遊学151、勉誠出版、pp. 143-156、2012年3月20日）を参照。